

リスク評価書（案）

No. __（初期）

ノルマル-オクタン
(n-Octane)

目 次

本文	1
別添 1 有害性総合評価表	
別添 2 有害性評価書	
別添 3 ばく露作業報告集計表	
別添 4 測定分析法	

年 月

厚生労働省

化学物質のリスク評価検討会

1 1 物理化学的性質 (別添2 参照)

2 (1) 化学物質の基本情報

3 名 称 : ノルマル-オクタン

4 別 名 : オクタン、OCTANE、n-Octane

5 化 学 式 : C_8H_{18}

6 構 造 式 : $CH_3-CH_2-CH_2-CH_2-CH_2-CH_2-CH_2-CH_3$

7 分 子 量 : 114.22

8 CAS番号 : 111-65-9

9 労働安全衛生法施行令別表第9 (名称等を表示し、又は通知すべき危険物及び有
10 害物) 第115号

11

12 (2) 物理的・化学的性状

外観 : 特徴的な臭気のある、無色の 液体 引火点 (C.C.) : 13°C

発火点 : 220°C

比重 (水=1) : 0.70

爆発限界 (空気中) : 1.0~6.5 vol%

沸 点 : 126°C

溶解性 (水) : 溶けない

蒸気圧 : 1.33 Pa (25°C)

オクターノール/水分配係数 $\log P_{ow}$: 4.00~5.18

蒸気密度 (空気=1) : 3.94

換算係数 : 1 ppm = 4.67 mg/m³ (25°C)

融 点 : -56.8°C

1 mg/m³ = 0.214 ppm (25°C)

13

14 (3) 生産・輸入量、使用量、用途

15 製造・輸入量 : 6,000 t (平成26年)

16 用 途 : n-オクタンは有機合成及び共沸蒸留の溶剤として用いられる。

17 製造業者 : 調査した範囲で情報は得られなかった。

18

19 2 有害性評価の結果 (別添1 及び別添2 参照)

20 (1) 発がん性

21 ○ヒトに対する発がん性は判断できない

22 根拠 : 調査した範囲内では、発がん性に関する十分な報告は得られてない。

23

24 (各評価区分)

25 IARC : 情報なし

26 産衛学会 : 情報なし

27 EU CLP : 情報なし

28 NTP 14th : 情報なし

29 ACGIH : 情報なし

30 DFG : 情報なし

31

32 ○閾値の有無 : —

33

34 (2) 発がん性以外の有害性

35 ○急性毒性

36 致死性

37 ラット

38 吸入毒性：LC₅₀=118,000 mg/m³ (25,252 ppm) /4h

39 LCLo>23.36 mg/L (5,000 ppm) /4h

40 経口毒性：LD₁₀₀=0.2 mL (140 mg) /ラット

41

42 マウス

43 吸入毒性：LCLo=80,000 mg/m³ (17,120 ppm) /2h

44

45 ○皮膚刺激性／腐食性：あり

46 根拠：ヒトで、皮膚に刺激性を有する。

47 ボランティアによる試験において、オクタン液体を前腕部に1時間、太腿
48 部に5時間経皮適用した結果、適用部位に充血、炎症、着色等が生じ、熱感
49 や痒みを伴った。5時間適用では痛みを伴う水疱形成がみられたが、回復性
50 を示した。

51

52 ○眼に対する重篤な損傷性／刺激性：あり

53 根拠：ヒトで、オクタン蒸気及び液体は眼に刺激性を有する。

54

55 ○皮膚感作性：報告なし

56

57 ○呼吸器感作性：報告なし

58

59 ○反復投与毒性（生殖毒性／遺伝毒性／発がん性／神経毒性は別途記載）

60 NOAEL=7.48 mg/L (1,600 ppm)

61 根拠：F344ラット（雌雄各10匹／群）を対象とする0、0.93、2.62、7.48 mg/L
62 (0、200、560、1,600 ppm) のn-オクタン（純度97%、不純物（0.01%v/v
63 未満）には、芳香族炭化水素、ベンゼン、オレフィン、酸素及びメタノー
64 ルを含む）の6時間／日、5日間／週、13週間の吸入ばく露試験において、
65 摂餌量、体重及び血液生化学検査（総コレステロール及びアルブミン）の
66 変化ならびに炎症細胞の浸潤及び腎臓の限局性の石灰化は、n-オクタンの
67 ばく露濃度との関連がなく、正常範囲であった。よってNOAELは7.48
68 mg/L (1,600 ppm) 以上とした。

69

70 不確実係数 UF=10

71 根拠：種差（10）

72 評価レベル=120 ppm (560 mg/m³)

73 計算式：1,600×6/8×1/10=120 ppm

74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113

○生殖毒性：判断できない

根拠：調査した範囲内では、報告は得られていない。

○遺伝毒性：判断できない

根拠：細菌を用いた復帰突然変異試験で一件の陰性報告があったが、*in vivo*試験及びヒトにおける報告がない。

○神経毒性：あり

NOAEL=2,000 ppm

根拠：ヒト及びマウスにおいて、オクタンは麻酔作用を有する。マウスにおいて神経毒性が報告されている。

CF1マウスに4時間、n-オクタンを100~7,000 ppmに段階的に増加させて吸入ばく露、あるいは500~7,000 ppmの一定濃度を吸入ばく露し、正の強化子（報酬）を用いた光刺激課題に対する学習行動パターンを検討した結果、反応は、段階的濃度では1,000 ppm、一定濃度では2,000 ppmまで対照群と変わらなかったが、さらに高濃度では濃度依存的に低下がみられ、7,000 ppmでは全く反応がみられなかった。

不確実係数：10

根拠：種差（10）

評価レベル：100 ppm（467 mg/m³）

計算式：2,000 ppm × 4/8 × 1/10 = 100 ppm

（3）許容濃度等

ACGIH TLV-TWA：300 ppm（1,401 mg/m³）（1976年設定）

根拠：オクタン及びその異性体の職業ばく露に対して、TLV-TWA 300 ppmが勧告される。この値は粘膜刺激と高濃度における麻酔作用の可能性を最小化することを意図している。このTLVの根拠は、オクタン異性体を吸入したヒトと動物の急性反応の比較及び他のパラフィン系炭化水素の類似性に基づいている（ヘプタン、ヘキサン（n-ヘキサン以外の異性体）及びペンタンのTLV文書参照）。Skin、SENあるいは発がん性の表記を勧告する十分なデータはない。

日本産業衛生学会：300 ppm（1,400 mg/m³）（1989年設定）

根拠：許容濃度設定に利用しうるオクタンの慢性ばく露に関する資料が乏しく数値の設定は困難であるが、急性毒性に関する同系列の炭化水素類との毒性比較やわが国の許容濃度としてブタン500 ppm、ペンタン300 ppmを採用していることなどから、オクタンの許容濃度として、300 ppm（1,400 mg/m³）を採用するよう提案する。

114
115 DFG MAK : 500 ppm (1961年設定)
116 ピークばく露限度カテゴリーII (2001年設定)
117 NIOSH REL : TWA 75 ppm (350 mg/m³)、C 385 ppm (1,800 mg/m³) (15
118 分)
119 OSHA PEL : TWA 300 ppm、STEL 375 ppm
120

121 (4) 評価値

122 ○一次評価値 : なし

123 動物試験により導き出された評価レベルが二次評価値の十分の一以上のため
124 (神経毒性に関する記載参照)

125 ※一次評価値 : 労働者が勤労生涯を通じて週40時間、当該物質にばく露した場合に、
126 それ以下のばく露については健康障害に係るリスクは低いと判断する濃度。閾値の
127 ない発がん性の場合には過剰発生率 10^{-4} に対応した濃度で設定する等、有害性に即し
128 て「リスク評価の手法」に基づき設定している。

129 ○二次評価値 : 300 ppm (1,400 mg/m³)

130 日本産業衛生学会が勧告している許容濃度及び米国産業衛生専門家会議
131 (ACGIH) が勧告している TLV-TWA を二次評価値とした。

132 ※二次評価値 : 労働者が勤労生涯を通じて週40時間、当該物質にばく露した場合にも、
133 当該ばく露に起因して労働者が健康に悪影響を受けることはないであろうと推測さ
134 れる濃度で、これを超える場合はリスク低減措置が必要。「リスク評価の手法」に基
135 づき、原則として日本産業衛生学会の許容濃度又はACGIHのばく露限界値を採用し
136 ている。

137 3 ばく露実態評価

138 (1) 有害物ばく露作業報告の提出状況 (詳細を別添3に添付)

139 ノルマル-オクタン有害物ばく露作業報告については、平成28年に107事業
140 場から計273作業について報告があり、対象物質の主な用途は、「他の製剤等の
141 原料として使用」、「対象物の製造」で、作業の種類は、「サンプリング、分析、
142 試験又は研究の業務」、「充填又は袋詰め作業」、「計量、配合、注入、投入
143 又は小分けの作業」、「保守、点検、分解、組立又は修理の作業」等であった。

144 対象物質の年間製造・取扱量は、「500kg未満」が20%、「500kg以上1t未
145 満」6%、「1t以上10t未満」が17%、「10t以上100t未満」が16%、「100t
146 以上1000t未満」が18%、「1000t以上」が22%で、作業1回当たりの製造・
147 取扱量は、「1kg未満又は1L未満」が44%、「1kg以上1t未満又は1L以上1kL
148 未満」が37%、「1t以上又は1kL以上」が19%であった。

149 また、当該作業従事労働者数は、「5人未満」が54%、「5人以上10人未満」
150 が19%、「10人以上20人未満」が5%、「20人以上」が22%であった。

151 さらに、1日当たりの作業時間は、「15分未満」が61%、「15分以上30分未
152 満」が5%、「30分以上1時間未満」が9%、「1時間以上3時間未満」が13%、
153

154 「3 時間以上 5 時間未満」が 11%、「5 時間以上」が 1%で、発散抑制措置とし
155 て、密閉化装置が設置されている作業は 27%、局所排気装置が設置されている作
156 業は 32%、全体換気装置が設置されている作業は 11%であった。

157 158 (2) ばく露実態調査結果

159 有害物ばく露作業報告のあった 107 事業場のうち、平成 29 年度に 5 事業場を
160 選定してばく露実態調査を実施した。対象事業場においては、製造・取扱作業に
161 従事する 14 人について個人ばく露測定を行うとともに、16 地点についてスポッ
162 ト測定を実施した。個人ばく露測定結果については、ガイドラインに基づき、8 時
163 間加重平均濃度（8 時間 TWA）を算定した。

164 165 ○測定分析法（詳細な測定分析法は別添 4 に添付）

- 166 ・サンプリング：球状活性炭管（400/200 mg）を用いて捕集
- 167 ・分析法：固体捕集管採取－溶媒抽出法

168 169 ○対象事業場における作業の概要

170 対象事業場における、ノルマル-オクタンの主な用途は、「他の製材等の原料と
171 して使用」、「溶剤、希釈又は溶媒」、「洗浄」、「接着」であった。

172 ノルマル-オクタンのばく露の可能性のある主な作業は、「洗浄」、「ガソリン
173 塗布」、「原料投入」、「ゴム糊小分け」等の作業で 1 回当たり 5 秒から数十分
174 の作業が多くを占めていた。（なお、ガソリン塗布については 1 回当たり 5 秒程
175 度の作業を 1 日 300～450 回行われる。）

176 また、作業環境は、調査した作業のほとんどが屋内で行われ、ばく露防止対策
177 は 50%の作業で局所排気装置が設置され、50%の作業で呼吸用保護具が使用さ
178 れていた。

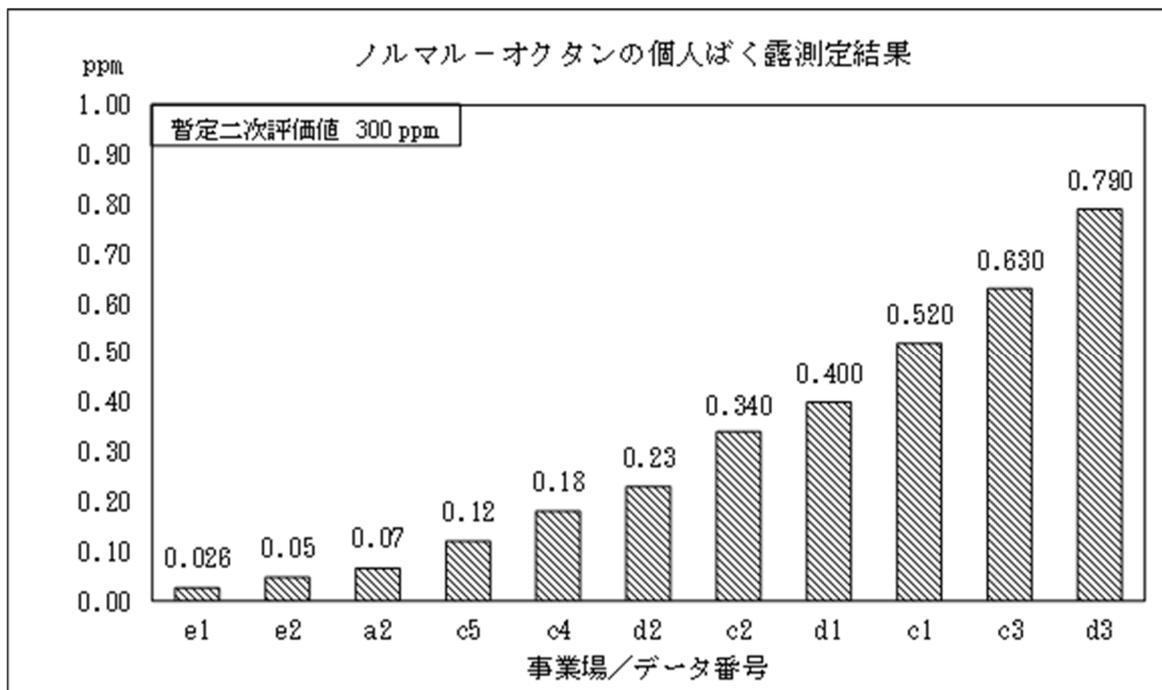
179 180 ○測定結果

181 測定は、14人の労働者に対し実施し、定量下限値未満の2データ及び午前中の
182 みのばく露調査となった1データを除き、11データを評価値として採用した。個
183 人ばく露測定の結果から、8時間TWAの最大値は、部品洗浄の作業中に測定され
184 た0.79 ppmであった。また、信頼率90%で区間推定した上限値（上側5%）は、
185 1.6 ppmであった。

186 このことから、ばく露最大値は、ばく露評価ガイドラインの規定（区間推定上
187 側限界値又はばく露最大値の高い方を最大値とする。）に準拠し、区間推定上側
188 限界値の 1.6 ppm となるが、二次評価値を大きく下回った。

189 また、スポット測定の実測データは、最大で原料投入作業の1.680 ppmであり、
190 1回の作業時間は約10分、1日に2回の作業であった。

194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211



被測定者	ばく露の可能性のある作業（測定中の実施時間）
d3	洗浄作業、エアー吹きによる乾燥作業（AM 30分 PM 30分）
c3	ガソリン塗布作業（AM 約5秒間×260回 PM 約5秒間×175回）
c1	原料投入 AM 糊作成作業（約2分間×7回） PM ゴム糊小分け作業（約10分間×2回）
d1	部品洗浄（洗浄作業、エアー吹きによる乾燥作業30分）
c2	原料投入外面液作成作業（約10分間×1回）
D2	洗浄作業、エアー吹きによる乾燥作業（AM 15分 PM 15分）
c4	ガソリン塗布作業（AM 約5秒間×196回 PM 約5秒間×139回）
c5	対象物質の直接的な取り扱いが無い（ゴム糊塗布監視作業あり）
a2	サンプル測定（AM 小分け作業3分間 PM 分析10分間）
e2	カラーライン、ジョイント糊作成（PM 60分）
e1	払拭作業（AM 10分×5回 PM 10分×5回）

212
213
214
215
216
217
218
219

220

221

表：最大ばく露濃度の推定

有効データ数	11
個人ばく露実測データの最大値 (TWA値)	0.79 ppm
コルモゴロフ・スミルノフ検定 (KS検定)	P値 \geq 0.10 (対数正規分布に適合する)
区間推定上側限界値 (信頼率90%、上側5%)	1.6 ppm
ガイドラインに基づく参考データ 上位10データでの区間推定上側限界値 (信頼率90%、上側5%)	1.5 ppm
暫定二次評価値 (ACGIH TLV-TWA)	300 ppm

(KS検定にはエクセル統計2012を用いた)

222

223 4 リスクの判定及び今後の対応

224 以上の事から、ノルマル-オクタンの製造・取扱事業所においては、最大ばく露量
225 1.6 ppm (区間推定上側限界値) は二次評価値 300 ppm を下回っており、経気道か
226 らのばく露によるリスクは低いと考えられる。また、当該物質について、日本産業
227 衛生学会又は ACGIH による経皮吸収の勧告はなされていない。

228 当該物質は、神経毒性及び反復投与毒性がある物質であり、事業者はリスクアセ
229 スメントを行い、その製造・取扱作業に従事する労働者等を対象として自主的なリ
230 スク管理を行うことが必要である。

231

ばく露実態調査集計表

用途	対象 事業場数 (延べ) (※5)	個人ばく露測定結果 [ppm]				スポット測定結果 [ppm]			作業環境測定結果 (A測定準拠) [ppm]			
		測定数	平均 (※1)	8時間 TWAの 平均 (※2)	最大値 (※3)	単位作業 場所数	平均 (※4)	最大値 (※3)	単位作業 場所数	平均	最大値	
オクタン												
2 ばく露作業報告対象物 を含有する製剤その他の 物の製造を目的とした原 料としての使用	2	3	0.238	0.227	0.520	6	0.912	1.276	0	-	-	
4 溶剤、希釈又は溶媒と しての使用	2	3	0.209	0.143	0.630	3	-	-	0	-	-	
5 洗浄を目的とした使用	2	4	0.376	0.242	0.790	4	0.739	0.919	0	-	-	
10 接着を目的とした使用	1	1	0.133	0.120	0.120	0	-	-	0	-	-	
12 その他	1	0	-	-	-	3	-	-	0	-	-	
計	8	11	0.255	0.193	0.790	16	0.838	1.276	0	-	-	
集計上の注：定量下限未満の値及び個々の測定値は測定時の採気量（測定時間×流速）により有効桁数が異なるが集計にはこの値を用いて小数点以下3桁で処理した。（1以上は有効数字3桁）												
※1：測定値の幾何平均値												
※2：8時間 TWA の幾何平均値												
※3：個人ばく露測定結果においては、8時間 TWA の、それ以外については測定値の、最大値を表す。												
※4：短時間作業を作業時間を通じて測定した値の単位作業場所ごとの算術平均を代表値とし、その幾何平均												
※5：同一事業場で複数の作業を行っている場合があるので、対象事業場数とばく露実態調査を行った事業場数は一致しない。												

有害性総合評価表

物質名：ノルマル-オクタン

有害性の種類	評価結果
ア 急性毒性	<p><u>致死性</u></p> <p>ラット 吸入：LC₅₀ = 118,000 mg/m³ (25,252 ppm) /4h LCLo > 23.36 mg/L (5,000 ppm) /4h 経口：LD₁₀₀ = 0.2 mL (140 mg) /ラット</p> <p>マウス 吸入：LCLo = 80,000 mg/m³ (17,120 ppm) /2h</p> <p><u>健康影響</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒトにおけるオクタンの致死量は13,500 ppmと報告されている。 ・ヒトにおけるオクタンの麻酔作用は、10,000 ppmあるいは8,000 ppmと報告されている。これはヘプタンの麻酔作用と同等あるいは2倍と推定される。 ・マウスにおけるオクタンの麻酔濃度は3,000 ppmである。 ・マウスに6,600～13,700 ppmのオクタンをばく露すると、30～90分で麻酔が認められる。 ・マウスにオクタンを吸入させると、31 mg/Lでは87分で横位となり、44 mg/Lでは25分で反射消失が生ずるが、いずれもばく露を止めると回復した。 ・マウスで横位になるオクタンの最小ばく露濃度は35 mg/L、反射消失を生ずるオクタンの最小ばく露濃度は50 mg/Lである。 ・雄ラットの肺に0.2 mLのn-オクタンが入った場合、短時間に心停止、呼吸麻痺、窒息を生じ、痙攣を起こして死亡した。 ・F344ラット（雌雄各5匹／群）に0、2.34、11.68、23.36 mg/L (0、500、2,500、5,000 ppm) のn-オクタン（純度97%、不純物（0.01%v/v未満）には、芳香族炭化水素、ベンゼン、オレフィン、酸素及びメタノールを含む）を4時間吸入ばく露した（OECDガイドラインTG 403準拠）。各ばく露チャンバーのn-オクタン濃度は目標濃度の範囲内であった。5,000 ppm群の雌雄で嗜眠性がみられたが、翌日にはすべての動物は正常に戻った。すべてのばく露群で死亡はみられず、体重も対照群と差はなかった。ばく露後15日目の剖検時の肉眼的検査でn-オクタンに関連した異常はみられなかった。
イ 刺激性／腐食性	<p>皮膚刺激性／腐食性：あり</p> <p>根拠：ヒトで、皮膚に刺激性を有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアによる試験において、オクタン液体を前腕部に1時間、太腿部に5時間経皮適用した結果、適用部位に充血、炎症、着色等が生じ、熱感や痒みを伴った。5時間適用では痛みを伴う水疱形成がみられたが、回復性を示した。 <p>眼に対する重篤な損傷性／刺激性：あり</p>

	根拠：ヒトで、オクタン蒸気及び液体は眼に刺激性を有する。
ウ 感作性	皮膚感作性：報告なし 呼吸器感作性：報告なし
エ 反復投与毒性(生殖毒性／遺伝毒性／発がん性／神経毒性は別途記載)	NOAEL=7.48 mg/L (1,600 ppm) 根拠：F344ラット(雌雄各10匹/群)に、0、0.93、2.62、7.48 mg/L (0、200、560、1,600 ppm)のn-オクタン(純度97%、不純物(0.01%v/v未満)には、芳香族炭化水素、ベンゼン、オレフィン、酸素及びメタノールを含む)を6時間/日、5日間/週、13週間吸入ばく露した(OECDガイドラインTG 413準拠)。各ばく露チャンバーのn-オクタン濃度は目標濃度の範囲内であった。すべてのばく露群で死亡及び毒性徴候はみられなかった。摂餌量はばく露12週間後の1,600 ppm群で減少がみられた。体重は、雄では1,600 ppm群で200 ppm群と比較し減少、雌では560 ppm群で200 ppmに比較し減少がみられたが、濃度依存性の変化はなかった。臓器重量には、雌雄ともに濃度依存性の変化はみられなかった。一般血液検査も、雌雄ともに濃度依存性の変化はみられなかった。凝固・線溶検査は、雄ではプロトロンビン時間(PT)及び活性化部分トロンボプラスチン時間(APTT)がすべてのばく露群で対照群と差はなかったが、雌ではAPTTが560及び1,600 ppm群で対照群に比較し増加した。血液生化学的検査では、雄の200 ppm以上の群の総コレステロール及び1,600 ppm群のアルブミンで高値がみられたが、これ以外は濃度依存性の変化はなかった。眼科的検査及び尿検査も変化はみられなかった。病理組織学的検査では、非特異的变化として肝臓、腎臓、肺及び精巣上体に、炎症細胞の僅か～軽度の浸潤及び胸腺の脱顆粒(thymus degranulation)がすべての群の数匹の動物でみられたが、濃度依存性の変化はみられなかった。腎臓に局限性の石灰化がすべての雌にみられたが、560 ppm群は対照群と比較してサイズ及び数が僅かに増加した。すべての変化は対照群とばく露群で等しく分布した。著者らは摂餌量、体重及び血液生化学検査(総コレステロール及びアルブミン)の変化ならびに炎症細胞の浸潤及び腎臓の局限性の石灰化は、n-オクタンのばく露濃度との関連がなく、正常範囲であったとし、NOAELは7.48 mg/L (1,600 ppm)以上とした。 不確実係数：10 根拠：種差(10) 評価レベル：120 ppm (560mg/m ³) 計算式：1,600 × 6/8 × 1/10 = 120 ppm
オ 生殖毒性	生殖毒性：報告なし
カ 遺伝毒性	遺伝毒性：判断できない 根拠：細菌を用いた復帰突然変異試験で一件の陰性報告があったが、 <i>in vivo</i> 試験およびヒトにおける報告がない。

キ 発がん性	発がん性：ヒトに対する発がん性は判断できない
ク 神経毒性	<p>神経毒性：あり</p> <p>根拠：ヒト及びマウスにおいて、オクタンは麻酔作用を有する。マウスにおいて神経毒性が報告されている。</p> <p>NOAEL=2,000 ppm</p> <p>根拠：CF1マウスに4時間、n-オクタンを100～7,000 ppmに段階的に増加させて吸入ばく露、あるいは500～7,000 ppmの一定濃度を吸入ばく露し、正の強化子（報酬）を用いた光刺激課題に対する学習行動パターンを検討した結果、反応は、段階的濃度では1,000 ppm、一定濃度では2,000 ppmまで対照群と変わらなかったが、さらに高濃度では濃度依存的に低下がみられ、7,000 ppmでは全く反応がみられなかった。</p> <p>不確実係数：10</p> <p>根拠：種差（10）</p> <p>評価レベル：100 ppm（467 mg/m³）</p> <p>計算式：2,000 ppm × 4/8 × 1/10 = 100 ppm</p>
ケ 許容濃度の設定	<p>ACGIH TLV-TWA：300 ppm（1,401 mg/m³）（1976年設定）</p> <p>根拠：オクタン及びその異性体の職業ばく露に対して、TLV-TWA 300 ppmが勧告される。この値は粘膜刺激と高濃度における麻酔作用の可能性を最小化することを意図している。このTLVの根拠は、オクタン異性体を吸入したヒトと動物の急性反応の比較及び他のパラフィン系炭化水素の類似性に基づいている（ヘプタン、ヘキサン（n-ヘキサン以外の異性体）及びペンタンのTLV 文書参照）。Skin、SENあるいは発がん性の表記を勧告する十分なデータはない。TLV-STELは、オクタン混合物の引火性のため勧告されないが、peak excursionは爆発限界の10%以下あるいは約1,000 ppmに管理されなければならない。</p> <p>日本産業衛生学会：300 ppm（1,400 mg/m³）（1989年提案）</p> <p>根拠：許容濃度設定に利用しうるオクタンの慢性ばく露に関する資料が乏しく数値の設定は困難であるが、急性毒性に関する同系列の炭化水素類との毒性比較やわが国の許容濃度としてブタン500 ppm、ペンタン300 ppmを採用していることなどから、オクタンの許容濃度として、300 ppm（1,400 mg/m³）を採用するよう提案する。</p> <p>DFG MAK：500 ppm（1961年設定）</p> <p>根拠：ヒト及び動物のいくつかのデータから、職場におけるオクタン異性体ばく露の重要な影響は、中枢神経抑制及び粘膜刺激である。オクタン異性体の反復ばく露の研究はない。このため、MAK値は同族体のn-ヘプタン及びn-ノナンとの構造類似</p>

性に基づいて評価する必要がある。

短鎖のn-ヘプタンのMAK値は500 ppmである（文書“n-ヘプタン”1998年英語版参照）。ラットの90日間吸入試験（6時間／日、5日間／週）において、n-ノナンのNOEC（無影響濃度）は590 ppmとされ、次に高い濃度の1,600 ppmでは、体重増加の抑制がみられ、ばく露中に中枢神経抑制、流涎及び流涙の兆候がみられた。組織学的検査では病理学的所見はみられなかった（Carpenter et al. 1978）。n-オクタンの急性刺激効果は、n-ヘプタンに比較し顕著ではなく、中枢神経作用が動物で2,000 ppmのn-オクタンのばく露後数時間に観察された。n-オクタンの急性影響と、より短鎖及び長鎖の構造類似物の反復ばく露後の毒性の比較から、n-オクタンのMAK値500 ppmを下げる必要性は示唆されていない。2,5-ジメチルヘキサンと主にC8脂肪族を含む混合物の短期試験では、n-オクタンよりも顕著な全身効果はみられなかった。したがって、すべてのオクタン異性体は、同様の作用を有すると仮定できる。

したがって、MAK値500 ppmは、トリメチル異性体（文書“トリメチルペンタン（全ての異性体）”2014年英語版参照）を除いて、他のオクタン異性体にも暫定的に適用される。ヒトにおける中枢神経抑制及び粘膜刺激の閾値を検討した研究は、MAK値の確認に参考になる。

気道の局所刺激効果はそれほど顕著ではないが（Kristiansen and Nielsen 1988）、準麻酔（prenarcotic）効果は、n-ヘプタンよりやや強いため（Glowa 1991）、n-オクタンの全身作用は局所作用より重要であり、ピークばく露限度カテゴリーIIに収載された。ピークばく露レベルで中枢神経作用は予想されないため、オクタン異性体はExcursion factor 2が設定された。

オクタン異性体の生殖毒性に関するデータはないため、MAK及びBAT値リストのsection IIcに収載された。

*In vitro*試験で、n-オクタンは適切量で皮膚に浸透しなかった。したがって、オクタン異性体は“H”に指定されない。

ヒト又は動物のいずれにおいても感作性のデータはない。構造から感作性が疑われるにもかかわらず、オクタン異性体によるばく露が証明されたヒトで感作性はみられていないため、“Sh”（皮膚感作性を有する物質）あるいは“Sa”（気道感作の危険性を有する物質）の指定の必要はない。

オクタン異性体のいずれにおいても遺伝毒性の試験結果はない。シリアンハムスター胚細胞を用いた細胞形質転換試験で、n-オクタン及び2-メチルヘプタンは形質転換の頻度を増加させなかった。トリメチルペンタン異性体でみられた肝細胞に対する増殖促進効果（文書“トリメチルペンタン（全ての異性体）”、2014年英語版参照）は、他のオクタン異性体に当てはめることはできない。したがって発がん物質のカテゴリーに分類できない。

生殖細胞変異原性物質のカテゴリー分類を証明するデータはない。

NIOSH REL : TWA 75 ppm (350 mg/m³)、C 385 ppm (1,800 mg/m³) [15分]

OSHA : TWA 300 ppm、STEL 375 ppm

有害性評価書

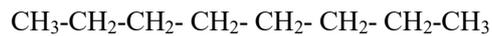
物質名：ノルマル-オクタン

1. 化学物質の同定情報 (ICSC 1997)

名称：ノルマル-オクタン

別名：オクタン、OCTANE、n-Octane

化学式：C₈H₁₈

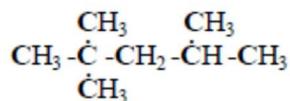


分子量：114.22

CAS番号：111-65-9

労働安全衛生法施行令別表9（名称等を表示し、又は通知すべき危険物及び有害物）第115号

ノルマル-オクタン（以下n-オクタンと略す）は、炭素数8の直鎖状炭化水素で、n-オクタンを含めて15個の構造異性体及び3個の立体異性体がある。オクタンはn-オクタンを指す場合（日本産業衛生学会文書）とn-オクタン及び異性体を総称する場合（ACGIH文書）がある。なお、イソオクタンは分岐を有する炭化水素の総称であるが、三つの分岐を有する2,2,4-トリメチルペンタン（CAS番号：540-84-1）（下図）を指す場合もある。



2. 物理化学的情報

(1) 物理化学的性状 (ICSC 1997)

外観：特徴的な臭気のある、無色の液体

引火点 (C.C.) : 13°C

比重 (水=1) : 0.70

発火点 : 220°C

沸点 : 126°C

爆発限界 (空气中) : 1.0~6.5 vol%

蒸気圧 : 1.33 kPa (20°C)

溶解性 (水) : 溶けない

蒸気密度 (空気=1) : 3.94

オクタン-1/水分配係数 log Pow : 4.00~5.18

融点 : -56.8°C

換算係数 :

1 ppm = 4.67 mg/m³ (25°C)

1 mg/m³ = 0.214 ppm (25°C)

(2) 物理的・化学的危険性 (ICSC 1997)

ア. 火災危険性 : 引火性が高い。

イ. 爆発危険性 : 蒸気/空気の混合気体は爆発性である。

ウ. 物理的危険性 : この蒸気は空気より重く、地面あるいは床に沿って移動することがある。遠距離引火の可能性があり、流動、攪拌などにより、静電気が発生することがある。

41 エ. 化学的危険性: 強酸化剤と反応し、火災や爆発の危険をもたらす。ある種のプラスチック、
42 ゴム、被膜剤を侵す。

43

44 3. 生産・輸入量/使用量/用途 (経産省 2016) (ACGIH 2001)

45 製造・輸入量: 6,000 t

46 用途: n-オクタンは有機合成及び共沸蒸留の溶剤として用いられる。

47 製造業者: —

48

49 4. 健康影響

50 【体内動態 (吸収・分布・代謝・排泄)】

51 吸収・分布 (MAK 2004)

52 ・オクタン異性体のヒトにおける肺吸収のデータはない。少なくともn-オクタンでは、n-ヘキサ
53 ンあるいはn-ヘプタンの肺吸収と大きな差はなく20%位と仮定できる。

54 ・雄F344ラットに1及び350 ppmの¹⁴C標識n-オクタンを2時間吸入ばく露した結果、1 ppm/1分間
55 ばく露あたりの吸収率は、各々、6.1及び3.4 nmol/kg体重であった。

56 ・F344ラットにn-オクタン、2,3,4-トリメチルペンタン及びテトラメチルブタンをばく露した比
57 較試験において、吸収速度は分岐の増加とともに減少した。

58 ・ラットに2,2,4-トリメチルペンタンを経口投与した場合、速やかにかつ完全に吸収された。し
59 たがって、他のオクタン異性体は、経口投与後よく吸収されると仮定できる。

60 ・液体のn-オクタンの皮膚透過速度を、単離ラット皮膚を用いて検討した結果、0.56 ng/cm²/hで
61 あった。これはn-オクタンがほとんど皮膚に透過しないことを示している。

62 ・n-オクタンの気相とヒトあるいはラット組織ホモジネート間の分配係数 (37°C) ならびにラッ
63 ト及びマウスにおけるn-オクタンの吸入試験から、オクタン異性体は主に体脂肪に蓄積する
64 ことが示された。

65 ・ラットに100 ppmのn-オクタンを3日間 (12時間/日) ばく露後の体脂肪中のn-オクタン濃度は、
66 血液より約100倍、腎臓より約15倍、脳より約10倍高かった。

67

68 代謝・排泄 (MAK 2004)

69 ・雌雄F344ラットに1,400 mg/kg体重のn-オクタンを14日間隔日経口投与した場合、尿中代謝物
70 として2-オクタノール、3-オクタノール、5-オキソヘキサン酸と6-オキソヘプタン酸が検出さ
71 れた。主要代謝物は、雌では2-オクタノール、雄では5-オキソヘキサン酸であった。ケトン、
72 ジケトン及びジオールは検出されなかった。したがって、γ-ジケトンの代謝生成によって起こ
73 るn-ヘキサンの神経毒性と同様の神経毒性は予想されない。

74 ・ラット肝ミクロソームとn-オクタンをインキュベート後、1-オクタノールが主な代謝物として
75 同定された。1-オクタノールはグルクロン酸抱合あるいはさらに酸化される。

76 ・雄F344ラットに、1 ppm及び350 ppmの¹⁴C標識n-オクタンを2時間吸入ばく露した結果、吸収
77 された放射能の約85%がばく露終了後30時間以内に排泄され、呼気中に半分、尿中に半分であ
78 った。呼気はCO₂が主であった。ばく露後70時間では吸収された放射能の約5%と2%がラット
79 の体内に残存した。

80

81 (1) 実験動物に対する毒性

82 ア. 急性毒性

83 致死性

84 実験動物に対するn-オクタンの急性毒性試験結果を以下にまとめる (RTECS 2009)

85 (産業医学 1989)。

	マウス	ラット	ウサギ
吸入、LC ₅₀	LCLo 80,000 mg/m ³ (17,120 ppm) /2 h	118,000 mg/m ³ (25,252 ppm) /4h LCLo > 23.36 mg/L (5,000 ppm) /4h	情報なし
経口、LD ₅₀	情報なし	LD ₁₀₀ 0.2 mL (140 mg) /ラット雄	情報なし
経皮、LD ₅₀	情報なし	情報なし	情報なし

86

87 健康影響

88 ・ マウスにおけるオクタンの麻酔濃度は 3,000 ppm である (産業医学 1989)。

89 ・ マウスに 6,600~13,700 ppm のオクタンをばく露すると、30~90 分で麻酔が認められる
90 (産業医学 1989)。

91 ・ マウスにオクタンを吸入させると、31 mg/L では 87 分で横位となり、44 mg/L では 25 分
92 で反射消失が生ずるが、いずれもばく露を止めると回復した (産業医学 1989)。

93 ・ マウスで横位になるオクタンの最小ばく露濃度は 35 mg/L、反射消失を生ずる最小ばく露
94 濃度は 50 mg/L である (産業医学 1989)。

95 ・ 雄ラットの肺に 0.2 mL の n-オクタンが入った場合、短時間に心停止、呼吸麻痺、窒息を
96 生じ、痙攣を起こして死亡した (産業医学 1989)。

97 ・ F344 ラット (雌雄各 5 匹/群) に 0、2.34、11.68、23.36 mg/L (0、500、2,500、5,000 ppm)
98 の n-オクタン (純度 97%、不純物 (0.01%v/v 未満) には、芳香族炭化水素、ベンゼン、
99 オレフィン、酸素及びメタノールを含む) を 4 時間吸入ばく露した (OECD ガイドライン
100 TG 403 準拠)。各ばく露チャンバーの n-オクタン濃度は目標濃度の範囲内であった。5,000
101 ppm 群の雌雄で嗜眠性がみられたが、翌日にはすべての動物は正常に戻った。すべての
102 ばく露群で死亡はみられず、体重も対照群と差はなかった。ばく露後 15 日目の剖検時の
103 肉眼的検査で n-オクタンに関連した異常はみられなかった (Sung et al. 2010)。

104

105 イ. 刺激性及び腐食性

106 ・ 調査した範囲内では、報告はない。

107

108 ウ. 感作性

109 ・ 調査した範囲内では、報告はない。

110

111 エ. 反復投与毒性 (生殖毒性、遺伝毒性、発がん性、神経毒性は別途記載)

112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151

吸入ばく露

・F344ラット（雌雄各10匹／群）に、0、0.93、2.62、7.48 mg/L（0、200、560、1,600 ppm）のn-オクタン（純度97%、不純物（0.01%v/v未満）には、芳香族炭化水素、ベンゼン、オレフィン、酸素及びメタノールを含む）を6時間／日、5日間／週、13週間吸入ばく露した（OECDガイドラインTG 413準拠）。各ばく露チャンバーのn-オクタン濃度は目標濃度の範囲内であった。すべてのばく露群で死亡及び毒性徴候はみられなかった。摂餌量はばく露12週間後の1,600 ppm群で減少がみられた。体重は、雄では1,600 ppm群で200 ppm群と比較し減少、雌では560 ppm 群で200 ppmに比較し減少がみられたが、濃度依存性の変化はなかった。臓器重量には、雌雄ともに濃度依存性の変化はみられなかった。一般血液検査も、雌雄ともに濃度依存性の変化はみられなかった。凝固・線溶検査は、雄ではプロトロンビン時間（PT）及び活性化部分トロンボプラスチン時間（APTT）がすべてのばく露群で対照群と差はなかったが、雌ではAPTTが560及び1,600 ppm群で対照群に比較し増加した。血液生化学的検査では、雄の200 ppm以上の群の総コレステロール及び1,600 ppm群のアルブミンで高値がみられたが、これ以外は濃度依存性の変化はなかった。眼科的検査及び尿検査も変化はみられなかった。病理組織学的検査では、非特異的变化として肝臓、腎臓、肺及び精巣上体に、炎症細胞の僅か～軽度の浸潤及び胸腺の脱顆粒（thymus degranulation）がすべての群の数匹の動物でみられたが、濃度依存性の変化はみられなかった。腎臓に限局性の石灰化がすべての雌にみられたが、560 ppm 群は対照群と比較してサイズ及び数が僅かに増加した。すべての変化は対照群とばく露群で等しく分布した。著者らは摂餌量、体重及び血液生化学検査（総コレステロール及びアルブミン）の変化ならびに炎症細胞の浸潤及び腎臓の限局性の石灰化は、n-オクタンのばく露濃度との関連がなく、正常範囲であったとし、NOAELは7.48 mg/L（1,600 ppm）以上とした（Sung et al. 2010）。

経口投与／経皮投与／その他の経路等

・F344ラット（雄6匹、雌7匹）に1,400mg/kg体重のn-オクタンを14日間隔日経口投与したが、腎臓の傷害はみられなかった（MAK 2004）。

・アルビノラット（雌6～10匹）に710 mg/kg体重のn-オクタンを2あるいは7日間連日腹腔内投与した結果、肝臓の種々の異物代謝酵素活性（benzo[a]pyrene hydroxylase, benzphetamine-N-demethylase, p-nitroanisole-O-demethylase, glutathione-S-transferase）の阻害がみられ、さらに、肝臓中のSH基の減少、脂質過酸化の増加、遊離コレステロールの増加、総コレステロール及びエステル化コレステロールの減少がみられた。肝臓、脾臓及び骨髄中のALP活性の増加がみられた。7日間投与後の血清で、総タンパク質、アルブミン及びコレステロール、アセチルコリンエステラーゼ及びカルボキシルエステラーゼ活性の減少がみられた（MAK 2004）。

オ. 生殖毒性

・調査した範囲内では、報告はない。

カ. 遺伝毒性

152 • n-オクタンは、細菌を用いた復帰突然変異試験においてS9mix添加の有無に関わらず陰
 153 性であった (Kim et al. 2010)。その他の遺伝毒性に関する報告は、調査した範囲内でな
 154 かった。

試験方法		使用細胞種/動物種・S9の有無・濃度/用量	結果
<i>In vitro</i>	復帰突然変異試験	ネズミチフス菌TA98、TA100、TA1535、TA1537 大腸菌WP2uvrA 312.5~5,000 µg/plate (±S9)	—

156 — : 陰性

157
 158 キ. 発がん性

159 吸入ばく露

160 • 調査した範囲内では、報告はない。

161
 162 (参考)

163 • F344ラット (雌雄各100匹/群) 及びB6C3F1マウス (雌雄各100匹/群) に、0、67、292、
 164 2,056 ppmの2%のベンゼンを含む無鉛ガソリンを2年間吸入ばく露した (ガソリン中、C8
 165 炭化水素は16.73%含まれ、オクタン異性体が4.98%、4個のトリメチル異性体の合計が
 166 11.75%であった)。雄ラットの腎臓に腺腫と腺がんがみられた (対照群: 所見なし、67
 167 ppm群: 腺腫1、292 ppm群: 腺がん2、腺腫2、肉腫1、2,056 ppm群: 腺がん6、腺腫1)。
 168 雌マウスの肝臓に腺腫及びがんがみられた (対照群: 14%、67 ppm群: 19%、292 ppm
 169 群: 21%、2,056 ppm群: 48%) (MacFarland et al. 1984) (MAK 2004)。

170
 171 ク. 神経毒性

172 吸入ばく露

173 • マウスにおけるオクタンの麻酔濃度は3,000 ppmである (産業医学 1989)。

174 • マウスに6,600~13,700 ppmのオクタンをばく露すると、30~90分で麻酔が認められる (産
 175 業医学 1989)。

176 • マウスにオクタンを吸入させると、31 mg/Lでは87分で横位となり、44 mg/Lでは25分で
 177 反射消失が生ずるが、いずれもばく露を止めると回復した (産業医学 1989)。

178 • マウスで横位になるオクタンの最小ばく露濃度は35 mg/L、反射消失を生ずる最小ばく
 179 露濃度は50 mg/Lである (産業医学 1989)。

180 • Wag/RijCrIBRラット雄25匹に0、1,400、4,200、14,000 mg/m³のn-オクタンを8時間/日、
 181 3日間吸入ばく露した結果、いずれのばく露群においても神経行動学的な影響 (自発運
 182 動量、機能観察総合評価、視覚弁別課題学習) はみられなかった (SIDS 2010)。

183 • CF1マウスに4時間、n-オクタンを100~7,000 ppmに段階的に増加させて吸入ばく露、あ
 184 るいは500~7,000 ppmの一定濃度を吸入ばく露し、正の強化子 (報酬) を用いた光刺激
 185 課題に対する学習行動パターンを検討した結果、反応は、段階的濃度では1,000 ppm、一
 186 定濃度では2,000 ppmまで対照群と変わらなかったが、さらに高濃度では濃度依存的に
 187 低下がみられ、7,000 ppmでは全く反応がみられなかった (MAK 2004)。

188 • CF1マウスに4時間、n-ペンタン～n-オクタンのアルカンを100～7,000 ppmに段階的に増
189 加させて吸入ばく露し、正の強化子（報酬）を用いた光刺激課題に対する学習行動パ
190 ターンを比較した結果、鎖長が増加するとともに反応の低下がみられ、EC₅₀はn-オクタン
191 2,500 ppm、ヘプタン3,900 ppm、ヘキサン7,000 ppm、n-ペンタン36,000 ppmであった（MAK
192 2004）。

193

194 ケ．その他の試験

195 • シリアンハムスター胚細胞を0.03～0.3 mM（3.426～34.26 μg/mL）のn-オクタンで処理し
196 たが、形質転換頻度の増加はみられなかった（MAK 2004）。

197

198 (2) ヒトへの影響（疫学調査及び事例）

199 ア．急性毒性

200 • オクタンの致死量は13,500 ppmと報告されている（ACGIH 2001）。

201 • オクタンの嗅覚閾値は、48 ppmと150 ppmが報告されている（ACGIH 2001）。

202 • オクタンの麻酔作用は、10,000 ppmあるいは8,000 ppmと報告されている。これはヘプタ
203 ンの麻酔作用と同等あるいは2倍と推定される（ACGIH 2001）。

204 • IDLH（Immediately Dangerous to Life or Health）として、1,000 ppmが勧告されている
205 （NIOSH）（2016/6/20検索）。

206

207 イ．刺激性及び腐食性

208 • ペンタン～オクタンの揮発性炭化水素類は、粘膜に軽度の刺激を示し、刺激の強さは炭
209 素鎖数の長さにより増加する（産業医学 1989）。

210 • オクタン蒸気は眼、鼻及び喉に、オクタン液体は皮膚及び眼に刺激性を有する（CHRIS
211 1984-5）（HSDB）（2016/06/24検索）。

212 • ボランティアにおいて、オクタン液体を前腕部に1時間、太腿部に5時間適用した結果、
213 適用部位に紅斑、充血、炎症、着色が生じ、熱感や痒みを伴った。5時間適用では痛みを
214 伴う水疱形成が見られたが、回復性を示した（HSDB）（2016/06/24検索）。

215

216 ウ．感作性

217 • 調査した範囲内では、報告はない。

218

219 エ．反復ばく露毒性（生殖毒性、遺伝毒性、発がん性、神経毒性は別途記載）

220 • 調査した範囲内では、報告はない。

221

222 オ．生殖毒性

223 • 調査した範囲内では、報告はない。

224

225 カ．遺伝毒性

226 • 調査した範囲内では、報告はない。

227

228 キ. 発がん性
229 発がんの定量的リスク評価
230 ・ (IRIS) (WHO/AQG-E 2000) (WHO/AQG-G 2005) (CalEPA 2011) に、ユニットリス
231 クに関する情報なし (2016/06/20検索)。
232
233 発がん性分類
234 IARC : 情報なし
235 産衛学会 : 情報なし
236 EU CLP : 情報なし
237 NTP 14thRoc : 情報なし
238 ACGIH : 情報なし
239 DFG : 情報なし
240
241 ク. 神経毒性
242 ・ オクタンの麻酔作用は、10,000 ppmあるいは8,000 ppmと報告されている。これはヘプタ
243 ンの麻酔作用と同等あるいは2倍と推定される (ACGIH 2001)。
244
245 (3) 許容濃度の設定
246 ACGIH TLV-TWA : 300 ppm (1,401 mg/m³) (1976年設定)
247 根拠 :
248 オクタン及びその異性体の職業ばく露に対して、TLV-TWA 300 ppmが勧告される。
249 この値は粘膜刺激と高濃度における麻酔作用の可能性を最小化することを意図して
250 いる。このTLVの根拠は、オクタン異性体を吸入したヒトと動物の急性反応の比較及
251 び他のパラフィン系炭化水素の類似性に基づいている (ヘプタン、ヘキサン (n-ヘキ
252 サン以外の異性体) 及びペンタンのTLV文書参照)。Skin、SENあるいは発がん性の
253 表記を勧告する十分なデータはない。TLV-STELは、オクタン混合物の引火性のため
254 勧告されないが、peak excursionは爆発限界の10%以下あるいは約1,000 ppmに管理さ
255 れなければならない (ACGIH 2001)。
256
257 日本産業衛生学会 : 300 ppm (1,400 mg/m³) (1989年提案)
258 根拠 :
259 許容濃度設定に利用しうるオクタンの慢性ばく露に関する資料が乏しく数値の設定
260 は困難であるが、急性毒性に関する同系列の炭化水素類との毒性比較やわが国の許容
261 濃度としてブタン500 ppm、ペンタン300 ppmを採用していることなどから、オクタ
262 ンの許容濃度として、300 ppm (1,400 mg/m³)を採用するよう提案する (産業医学 1989)。
263
264 DFG MAK : 500 ppm (1961年設定)
265 根拠 :
266 ヒト及び動物のいくつかのデータから、職場におけるオクタン異性体ばく露の重要
267 な影響は、中枢神経抑制及び粘膜刺激である。オクタン異性体の反復ばく露の研究は

268 ない。このため、MAK値は同族体のn-ヘプタン及びn-ノナンとの構造類似性に基づい
269 て評価する必要がある。

270 短鎖のn-ヘプタンのMAK値は500 ppmである(文書”n-ヘプタン”1998年英語版参照)。
271 ラットの90日間吸入試験(6時間/日、5日間/週)において、n-ノナンのNOEC(無影
272 響濃度)は590 ppmとされ、次に高い濃度の1,600 ppmでは、体重増加の抑制がみられ、
273 ばく露中に中枢神経抑制、流涎及び流涙の兆候がみられた。組織学的検査では病理学
274 的所見はみられなかった(Carpenter et al. 1978)。n-オクタンの急性刺激効果は、n-へ
275 プタンに比較し顕著ではなく、中枢神経作用が動物で2,000 ppmのn-オクタンのばく露
276 後数時間に観察された。n-オクタンの急性影響と、より短鎖及び長鎖の構造類似物の
277 反復ばく露後の毒性の比較から、n-オクタンのMAK値500 ppmを下げる必要性は示唆
278 されていない。2,5-ジメチルヘキサンと主にC8脂肪族を含む混合物の短期試験では、n-
279 オクタンよりも顕著な全身効果はみられなかった。したがって、すべてのオクタン異
280 性体は、同様の作用を有すると仮定できる。

281 したがって、MAK値500 ppmは、トリメチル異性体(文書”トリメチルペンタン(全
282 体の異性体)”2014年英語版参照)を除いて、他のオクタン異性体にも暫定的に適用さ
283 れる。ヒトにおける中枢神経抑制及び粘膜刺激の閾値を検討した研究は、MAK値の確
284 認に参考になる。

285 気道の局所刺激効果はそれほど顕著ではないが(Kristiansen and Nielsen 1988)、準
286 麻酔(prenarcotic)効果は、n-ヘプタンよりやや強いため(Glowa 1991)、n-オクタンの
287 全身作用は局所作用より重要であり、ピークばく露限度カテゴリーIIに収載された。
288 ピークばく露レベルで中枢神経作用は予想されないため、オクタン異性体はExcursion
289 factor 2が設定された。

290 オクタン異性体の生殖毒性に関するデータはないため、MAK及びBAT値リストの
291 section IIcに収載された。

292 *In vitro*試験で、n-オクタンは適切量で皮膚に浸透しなかった。したがって、オクタ
293 ン異性体は”H”に指定されない。

294 ヒト又は動物のいずれにおいても感作性のデータはない。構造から感作性が疑われ
295 るにもかかわらず、オクタン異性体によるばく露が証明されたヒトで感作性はみられ
296 ていないため、”Sh”(皮膚感作性を有する物質)あるいは”Sa”(気道感作の危険性を有
297 する物質)の指定の必要はない。

298 オクタン異性体のいずれにおいても遺伝毒性の試験結果はない。シリアンハムスタ
299 ー胚細胞を用いた細胞形質転換試験で、n-オクタン及び2-メチルヘプタンは形質転換
300 の頻度を増加させなかった。トリメチルペンタン異性体でみられた肝細胞に対する増
301 殖促進効果(文書”トリメチルペンタン(全ての異性体)”, 2014年英語版参照)は、他
302 のオクタン異性体に当てはめることはできない。したがって発がん物質のカテゴリー
303 に分類できない。

304 生殖細胞変異原性物質のカテゴリー分類を証明するデータはない(MAK 2004)。
305

306 NIOSH REL : TWA 75 ppm (350 mg/m³)、C 385 ppm (1,800 mg/m³) [15分]

307 OSHA : TWA 300 ppm、STEL 375 ppm

308 引用文献

- 309 • (ACGIH 2001) American Conference of Governmental Industrial Hygienists (ACGIH) : 2015 TLVs
310 and BELs with 7th Edition Documentation CD-ROM
- 311 • (ACGIH 2015) American Conference of Governmental Industrial Hygienists (ACGIH) : TLVs and
312 BELs (Booklet 2015)
- 313 • (CalEPA 2011) California EPA : “Hot Spots Unit Risk and Cancer Potency Values” (updated 2011)
314 (https://www.oehha.ca.gov/air/hot_spots/2009/AppendixA.pdf)
- 315 • (CHRIS 1984-5) U.S. Coast Guard, Department of Transportation. The Chemical Hazards Response
316 Information System (CHRIS) Hazardous Chemical Data. Volume II (1984-5)
- 317 • (EU CLP) The European Chemicals Agency (ECHA) : Harmonised classification - Annex VI of
318 Regulation (EC) No 1272/2008 (CLP Regulation)
319 (<http://echa.europa.eu/information-on-chemicals/cl-inventory-database/-/discli/details/44350>)
- 320 • (HSDB) Hazardous Substances Data Bank (HSDB) , U.S. National Library of Medicine, TOXINET,
321 N-OCTANE
322 (<https://toxnet.nlm.nih.gov/cgi-bin/sis/search2/f?./temp/~QD85bU : 1>)
- 323 • (IARC) IARC Monographs on the Evaluation of Carcinogenic Risks to Humans. List of classifications,
324 Volumes 1–112.
325 (http://monographs.iarc.fr/ENG/Classification/latest_classif.php)
- 326 • (ICSC 1997) 国際化学物質安全性カード (ICSC) 日本語版 オクタンICSC番号0933 (1997)
327 (<http://www.nihs.go.jp/ICSC/icssj-c/icss0933c.html>)
- 328 • (IRIS) U.S. Environmental Protection Agency. Integrated Risk Information System (IRIS) . A-Z List
329 of Substances
330 ([http://cfpub.epa.gov/ncea/iris/index.cfm?fuseaction=iris.showSubstanceList&list_type=alpha&view](http://cfpub.epa.gov/ncea/iris/index.cfm?fuseaction=iris.showSubstanceList&list_type=alpha&view=all)
331 =all)
- 332 • (Kim et al. 2010) Kim SJ, Rim KT, Kim HY, Yang JS. Mutagenicity of octane and tetrasodium
333 pyrophosphate in bacterial reverse mutation (Ames) test. J Toxicol Sci. 35 : 555-62 (2010)
- 334 • (MacFarland et al.1984) MacFarland HN, Ulrich CE, Holdsworth CE, Kitchen DN, Halliwell WH, Blum
335 SCA chronic inhalation study with unleaded gasoline vapor. J Amer Coll Toxicol 3 : 231-248 (1984)
- 336 • (MAK 2004) Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG) : Octane and its Isomers (except trimethylpentane
337 isomers) [MAK Value Documentation, 2004]
338 (<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/3527600418.mb0221isme3814/pdf>)
- 339 • (MAK 2015) Deutsche Forschungsgemeinschaft : List of MAK and BAT Values 2015
340 (<http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/9783527695539.oth1/pdf>)
- 341 • (NIOSH) NIOSH : NIOSH Pocket Guide to Chemical Hazards
342 (<http://www.cdc.gov/niosh/npg/default.html>)
- 343 • (NTP 2016) National Toxicology Program (NTP) : 14th Report on Carcinogens (2016)
344 (<http://ntp.niehs.nih.gov/pubhealth/roc/index-1.html>)
- 345 • (SIDS 2010) Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD) : SIDS Initial
346 Assessment Report For SIAM 30, C7-C9 Aliphatic Hydrocarbon Solvents, SIDS Dossier (2010)
347 (http://webnet.oecd.org/HPV/UI/SIDS_Details.aspx?key=e1b8d49f-5be8-4738-9954-

- 348 355dbc27050e&idx=0)
- 349 • (Sung et al. 2010) Sung JH, Choi BG, Kim HY, Baek MW, Ryu HY, Kim YS, Choi YK, Yu IJ, Song
350 KS. Acute and subchronic inhalation toxicity of n-octane in rats. Saf Health Work. 1 : 192-200 (2010) .
- 351 • (OSHA 1988) Occupational Safety and Health Administration (OSHA) : 1988 OSHA PEL Project
352 Documentation, OCTANE
353 (<https://www.cdc.gov/niosh/pel88/111-65.html>)
- 354 • (RTECS 2009) RTECS : Registry of Toxic Effects of Chemical Substances. octane (2009)
355 (<https://www.cdc.gov/niosh-rtecs/RG802C80.html>)
- 356 • (WHO/AQG-E) WHO "Air Quality Guidelines for Europe : Second Edition", (2000)
357 (<http://www.euro.who.int/document/e71922.pdf>)
- 358 • (WHO/AQG-G) WHO "Air Quality Guidelines – global update 2005
359 (http://whqlibdoc.who.int/hq/2006/WHO_SDE_PHE_OEH_06.02_eng.pdf)
- 360 • (産業医学1989) 日本産業衛生学会 (JSOH) : 許容濃度暫定値 (1989) の提案理由、産業医
361 学31巻4号278-300頁 (1989)
- 362 • (産衛 2016) 日本産業衛生学会 (JSOH) : 許容濃度等の勧告 (2016年度)、産業衛生学雑誌58
363 巻5号 (2016)
- 364 • (経産省 2016) 経済産業省 : 一般化学物質等の製造・輸入数量 (H26年度実績)

ノルマル-オクタン標準測定分析法

化学式：C ₈ H ₁₈		分子量：114.23	CASNo：111-65-9
許容濃度等： ACGIH TLV(TWA)：300 ppm (1410 mg/m ³) 日本産業衛生学会：300 ppm	物性等 沸点：125.6℃ 融点：-56.8℃ 蒸気圧：1880 Pa (25℃) 形状：常温で液体、水と混和しない		
別名 1-メチルヘプタン			
サンプリング		分析	
サンプラー：球状活性炭管 (400/200 mg) (柴田科学 No.080150-093) サンプリング流量：0.1 L/min サンプリング時間：4時間 (24 L) 保存性：添加量 0.03、3、70 mgにおいて冷蔵庫(4℃)にて5日間保管可能		分析方法：固体捕集管採取-溶媒抽出法 GC/FID 脱着：二硫化炭素 2 mL 溶出30分振とう後、分取 機器：GC2014FID (島津製作所) 分析条件 カラム：SH-RTX-WAX 30 m id = 0.25 mm, thin layer 0.25 μm (島津製作所) キャリアガス：He, 1.0 mL/min スプリット分析40：1 オープン温度：40℃ (5 min hold) - 5℃/min - 50℃ - 30℃/min - 230℃ (3 min) 注入口温度：220℃ 検出部FID温度：230℃ 注入量：1.0 μL 保持時間：3.4 min 検量線：20-35000 μg/mLの範囲で直線性が得られている。 定量法：絶対検量線法	
精度			
脱着率			
; 添加量 33 μg 107.6%			
; 添加量 69.25 mg 101.1%			
(0.1 L/min 8時間として)			
回収率			
; 添加量 33 μg 104.5%			
; 添加量 69.25 mg 107.9%			
(0.1 L/min 8時間として)			
Split (40:1)			
検出下限 (3SD) : 11 ppb (52 μg/m ³)			
定量下限 (10SD) : 36 ppb (172 μg/m ³)			
適用：個人ばく露測定、作業環境測定 その他の脂肪族炭化水素系物質の測定にも適応可能 (溶出液の脱着効率が異なる場合があるので注意)。 この場合はRTX-5、などの非極性カラムを用い、上記カラムまたはHP-INNOWAXなどの極性カラムと比較確認を行う。RTX-5、HP-5MSの場合、ノルマル-オクタンとイソオクタン (2,2,4-トリメチルペンタン) は分離する。			
妨害：特に無し、石油系材料からのコンタミネーションに気を付けること			
参考文献			
OSHA PV2138 : n-Octane NIOSH Method 1500 : hydrocarbons BP36-216℃ DFG method 2 : Solvent mixtures (2013)			
1) 星純也、上野広行ら、「石油系混合溶媒の成分組成調査」、東京都環境科学研究所年報135-139 (2007)			
2) ノルマル-オクタン 安全データシート (SDS)、昭和化学、No.15003250			
3) n-Octane (Standard material for GC No.S0280)、安全データシート、東京化成工業、2016/6/1			
4) カーボンビーズアクティブJumbo type 400/200mg (080150-093) 取扱説明書、柴田科学			
5) Anna Tang, OSHA PV2138 Sampling and Analytical Method n-Octane, Control no.T-PV2138-01-0403-CH (2004), https://www.osha.gov/dts/sltc/methods/partial/pv2138/pv2138.html			
6) NIOSH method 1500, hydrocarbons BP36-216℃, Niosh manual of analytical methods (NMAM), Fourth Edition : https://www.cdc.gov/niosh/docs/2003-154/pdfs/1500.pdf			
7) Solvent mixture methods No.2, The MAK collection for Occupational Health and Safety 2016, Vol1, No3			

作成日；平成29年1月26日